

横浜美術館中高生プログラム { 美術を体験しよう! 伝えよう! } 記録誌

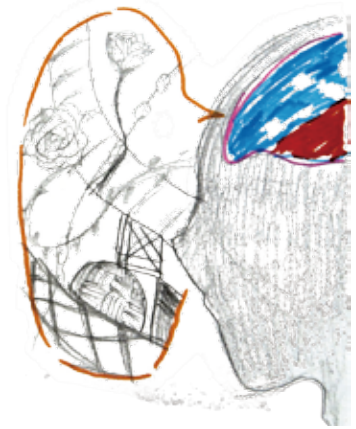


自

ミュージアム

編

夢



横浜美術館中高生プログラム

美術を体験しよう!伝えよう! [概要]

約5ヶ月にわたる中高生対象の長期プログラム。中高生が横浜美術館コレクション展2016年度第1期の作品にふれ、様々な美術の見方や楽しみ方を体験し、8月に小学生対象のプログラム「美術をたのしむ!こども探検隊」を企画、実施した。プログラム終了後、番外編として有志が本誌の編集にあたった。

日程 2016年6月12日 [日]～11月6日 [日]
(本編8回+番外編2回)
会場 横浜美術館8階および展示室
対象 中学生、高校生
参加費 無料
参加人数 16名

美術を体験しよう編

第1回 | はじめに | 6月12日 [日] 10:00～12:00

- アイスブレイク ● プログラムの目的と概要説明
 - 閉館中のコレクション展展示室の見学
- ◎参加人数14名

第2回 | 作品を分析的にみよう

6月26日 [日] 10:00～12:00
講師：宮武カルメン(元・つくば言語技術教育研究所)

- 渡辺幽香《幼児図》を分析する
 - 遠藤彰子《街(Street)》を分析する
- ◎参加人数14名

第3回 | 作品とのおしゃべり体験

7月10日 [日] 10:00～14:00
講師：市原幹也(演出家)

- 戯曲の書き方 ● ものとおしゃべり
 - 作品とおしゃべりして戯曲を書く ● 戯曲を朗読して発表する
- ◎参加人数11名

第4回 | 「美術」って何だろう?

7月24日 [日] 10:00～14:30
講師：大嶋貴明(宮城県美術館教育普及部)

- 感覚を楽しむ / 感覚を共有する / 視点を変える
 - 椅子を配置する / 椅子を表現する
 - 美術のなぞに挑む
 - 小学生のためのワークショップを考える
- ◎参加人数14名

美術を伝えよう編

第5回 | 「美術をたのしむ!こども探検隊」の企画①

8月7日 [日] 10:00～14:00
● 小学生に伝えたいことを考える ● プログラム案の検討

◎参加人数13名

第6回 | 「美術をたのしむ!こども探検隊」の企画②

8月11日 [木・祝] 10:00～12:00
● プログラム最終案の作成と当日準備

◎参加人数13名

第7回 | 美術をたのしむ!こども探検隊

8月21日 [日] 10:00～14:30
● 小学生のためのプログラム実施

◎参加人数14名

まとめ+記録編

第8回 | これまでを振り返って

9月4日 [日] 10:00～12:00
● プログラムのまとめ

◎参加人数14名

番外編1 | 記録誌をつくる①

10月30日 [日] 10:00～11:30
● 記録誌のアイデアを出し合う

◎参加人数8名

番外編2 | 記録誌をつくる②

11月6日 [日] 10:15～11:30
● デザインとは?
講師：森上暁(NDCグラフィックス デザイナー)

- 記録誌のアイデアをプレゼンテーション
- 記録誌のタイトルを考える

◎参加人数8名

美術をたのしむ! こども探検隊 [概要]

すべての内容を中高生が計画した、小学生と美術を楽しむためのプログラム。4グループにわかれて中高生が導き役となり、コレクション展ツアーとワークショップ、ランチ交流を行った。

日時 2016年8月21日 [日] 10:30～14:00
(ランチ交流会を含む)

会場 横浜美術館8階および展示室
対象 小学4～6年生
参加費 無料
参加人数 14名



横浜美術館中高生プログラム { 美術を体験しよう!伝えよう! } 記録誌

ミ ユー ジ ア ム
見 遊 自 編 夢

発行にあたって

3 回目の中高生プログラムとなる今年度は、横浜美術館のコレクション展を取り上げた。およそ5ヶ月にわたる長期であること、小学生のための展示ツアーとワークショップを「美術をたのしむ!こども探検隊」として中高生自身が企画・実施することがこのプログラムの特徴である。● 今回はじめて企画展ではなく当館コレクション展2016年度第1期(2016年4月23日～9月11日)をテーマとしたので、「こども探検隊」の前の段階の【美術を体験しよう編】では、これまでのように現代アーティストを講師に迎えるのではなく、3人の各分野の専門家にワークショップを依頼した。内容も中高生が「みる」ことにアプローチする構成を心がけた。たとえば第1回では、4室ある展示室の雰囲気を感じようと、あえて作品には近づかずに遠目でみながら展示室を巡った。第2回の講師によるワークショップ「作品を分析的にみよう」(宮武カルメンさん)では、作品1点を丁寧にみれば、さまざまなことに気がつき理解が深まるという体験。実際「穴が開くほど」みることを繰り返したので、それはこの冊子デザインにも反映され、真ん中に穴が貫通することとなった。第3回「作品とのおしゃべり体験」(市原幹也さん)では、演劇的な手法で作品と会話し「出会いから別れまで」をテーマに戯曲を書いた。作品との対話がイマジネーション豊かに言葉であらわされた戯曲は、どれもとても面白かったので、2017年3月下旬にプロの俳優が館内の彫刻作品の傍らで戯曲を上演する、という試みを実施する。第4回「『美術』って何だろう?」(大嶋貴明さん)では、「椅子を美術作品にみえるように積むには?」と、みえ方(展示)とその考え方に思考をめぐらすワークショップで、椅子の山が美術作品にみえる瞬間を体験。長方形の鏡を目の下において美術館内外を歩くという視点を変容させる体験もあった。● 作品を分析する、作品とおしゃべりする、自分の視点を変えてみるなどの【美術を体験しよう編】でおこなった「みる」を巡る多様な体験は、【美術を伝えよう編】のハイライト「こども探検隊」に活かされた。中高生と小学生のグループで展示室を巡り、みて話しをする時間がこれまでの2回の中高生プログラムと比較しても長く、時には作品前のソファに座り込んで話し込むなど会話も弾んでいた。● 過日、参加者の保護者にお目にかかる機会があったので、プログラムがあった日の際の様子を尋ねた。「家に帰ってくると、顔が輝いているから、楽しかったのだと思います」という嬉しいコメント。中高生たちは言葉では多くを語らないが、頭と心は常に敏感に感応しているのは間違いない。今回のプログラムを通して、みることを深化させ、美術ってなんだろうと考えた中高生たち。これからも美術と美術館を日常に組み込んでほしいと願っている。

横浜美術館
教育普及グループチームリーダー
主任エデュケーター | 主任学芸員

端山聡子



中高生プログラム参加者

- ◎ 青木弥優(高校1年)
- ◎ 青柳梨紗(高校2年)
- ◎ 安藤一生(中学2年)
- ◎ 宇佐美友悠(中学1年)
- ◎ 大井花歩(中学2年)
- ◎ 金森紫乃(中学1年)
- ◎ 上治唯奏(高校1年)
- ◎ 佐藤明日香(中学2年)
- ◎ 高木絵莉(高校1年)
- ◎ 土屋麟(高校1年)
- ◎ 二本柳姫乃(中学1年)
- ◎ 浜田清通(高校1年)
- ◎ 福島諒大(中学1年)
- ◎ 星安優美(中学3年)
- ◎ 茂木葉々(高校2年)
- ◎ 吉田菜乃(中学3年)

スタッフ

- ◎ 関淳一(教育普及グループ長)
- ◎ 端山聡子(教育普及グループチームリーダー)
- ◎ 河上祐子
- ◎ 太田雅子
- ◎ 六島芳朗

ボランティア

- ◎ 池田憲夫
- ◎ 井上三香
- ◎ 田原寛子
- ◎ 三浦章子



6 | 12 日

第1回……◎はじめに



フルーツバスケットでアイスブレイク



他己紹介の相手にインタビュー

初顔合わせの日。まずはお互いを知る前にスタッフも交えて全員でフルーツバスケット。椅子を取ろうと本気のダッシュで自然と笑顔になったら、二人一組になって他己紹介。その後、閉館中の誰もいないコレクション展示室をぐるりと一周した。気になった作品について話し、初めて「今日の発見」ノートを記入した。

閉館中の展示室を一周して
 映像や写真など、あんな作品もあるのかと思うものが多かった。
 一つも一つ一つの作品を見ていくが、全体をざーっとみると流れがわかる。
 絵に見られているみたい。

6 | 26 日

第2回……●作品を分析的にみよう
講師：宮武カルメン(元・つくば言語技術教育研究所)



年齢の異なる生徒たち、中学生と高校生が混ざっているグループを対象にこのプログラムを実践したのは日本では初めてでしたが、みんな活発に発言してくれて、とてもやりやすかったです。中高生たちは今回初めて知る方法で、自分の目で見て、自分の問いをつかっていきました。絵の中に描かれている様々なものを分析しながら発見していくことに、とても興味をもって参加してくれたと思います。

宮武カルメンさんとともに、1点の絵をみんなで丁寧に細部までよくみて分析し、描かれている内容が意味するものに迫った。まず展示室内で渡辺幽香《幼児図》をじっくり観察。いったん部屋に戻り、画像をみながらさらにみんなで分析を加えた。「何が描かれている?」「場所は?」「季節は?」「赤ちゃんは何歳?」など、カルメンさんから投げかけられる質問に、絵の中に具体的な根拠を探して答える中高生たち。再び展示室に戻り、分析内容の確認も含めて改めて作品をよくみた。みればみるほど新たな発見がある。みえるものを確認して、それを言葉にして表すことの往復で、より深い作品理解へと導かれた時間だった。



遠藤彰子《街(Street)》。描かれた季節は? 時間は?



渡辺幽香《幼児図》を穴が開くほどみる

- ◆ いままで描かれた人の気持ちしか考えたことがなかった。
- ◆ 細かく分析したのは初めて。
- ◆ 科目で例えると「社会」のよう。
- ◆ わかることもまとめるのに似ていた。
- ◆ 様々な観点から考えることで、パッと見ただけではわからないことも発見できると知った。
- ◆ 何回も見ると、どんどん印象が変わるのがおもしろい。
- ◆ 作品をじっくり見るようになった。

7 | 10 日

第3回……●作品とのおしゃべり体験
講師：市原幹也(演出家)



中高生と作品とのおしゃべりのなかには、専門家も見つけることができない作品の魅力がたくさん発掘されていました。作品から聞こえる声なき声に耳を澄ますように、展示室にジッと立つ彼らの姿がとても印象的でした。彼らの鑑賞体験が次なる作品、戯曲を生み、またその朗読劇もみんなで鑑賞することができるという創造的な循環が立ち上がりました。いつもの美術館をまるで劇場のように変貌させた彼らの想像力に、盛大な拍手を!

市原幹也さんのワークショップでは、作品とのおしゃべりして戯曲を書くというゴールを目指し、まずは二つのウォームアップ。一つは戯曲の書き方を知るためにごく短い戯曲を書く、もう一つは、自分の持ちものとのおしゃべりする、というもの。その後「出会いから別れまで」をテーマに、自分の選んだ作品とじっくり向き合って、戯曲を執筆。原稿用紙に清書後、執筆者以外の二人が戯曲を朗読した。想像力を羽ばたかせてつむぎだした戯曲は、作品鑑賞の新たな可能性を拓いた。



出来上がった戯曲を朗読すると、作品が生きているよう



- ◆ ものとおしゃべるのは普段ではありえない経験。
- ◆ 本当に生きているように作品と対話できた。
- ◆ 作品の意見や気持ちが変わった。
- ◆ 作品の外に見えるものを想像するのが楽しかった。
- ◆ 前回とまったく違う視点。
- ◆ 絵を見ていたら書きたいことがたくさん出てきて、まとめるのが大変だった。



自分と作品のおしゃべりを戯曲にする

7 | 24 | 日

第4回……●「美術」って何だろう？
講師：大嶋貴明(宮城県美術館教育普及部)



中高生のみなさんとは、少しだけ濃密な場を共にできたでしょうか。長期のプログラムだと、一つ一つのプログラムでそれぞれの「美術」に対するイメージや思いや考えが違って揺れ、それらを表現したり言語化をせまられたりします。でも、みなさんには、出したいものも出せないものもあったことでしょう。言語化できなくても、その揺れの核に世界観はあって、美術はそれが変化する、その動きのこと。だから、本番はプログラムの外の日常でもよいもよめ時かもしれません。

大嶋貴明さんによる最初のワークは、自分がここに存在することの確認と、他者を感じる。足の指を1本ずつ意識し、手の指をゆっくり動かし、目を閉じて音へも意識を向ける。そして、アイマスクを付けて向かい合い、二人の鉛筆の先を合わせて相手の呼吸を感じながら線を描いた。次に椅子をつかったワーク。各人が2脚の椅子を配置し、それぞれの配置の仕方に類似の発想と異なる発想を確認。グループで取り組んだ「椅子をかっこよく積む」「椅子に見えないように積む」ワークでは、椅子の山が作品のようにみえる一瞬があった。午後は、目の下の鏡に写る風景をみながら歩くと、いつもの景色が違うもの感じられる、という視点の変容体験。最後に「美術のなぞに挑む」として、中高生の質問に大嶋さんが回答。答え切れなかった分は後日手紙で答えていただいた(抜粋を12ページに掲載)。美術って何だろう、これまで知っていたものと少々違うかも、と頭と体で感じた日。「美術は世界観の拡大だ」という少し難解な言葉も印象に残った。



相手の動きに合わせて線を描く



◆ 同じ椅子でも、位置や方向も変えるだけで一つの作品に見え、違った感覚になる。
◆ 鏡で外を歩いたら世界が反転した。
◆ いつもとちがう見方で!!ちがうものが見える。
◆ 感覚も意識すると絵の見方が変わる。
◆ 情報がいっぱいだった。

普段座っている椅子が全くの別物に見える

美術のなぞに挑むQ&A(抜粋)

【中高生からの質問】

当たり前の風景を描くのはなぜですか?

【大嶋さんの答え】

描かれる対象が、そのものとしてすごかったり宝物だったりしても、それを描いた絵がすごくなったり宝物になつたりするわけではありません。品評会で一等のリンゴを描いた絵は絵画コンクールで一等をとれるわけではないのです。近代以降、画家が珍しいとかすごい風景とかいう既存の価値ではなく、新しい価値=感性にもとづいた作品を創ろうとすれば、自分の選んだ、自分にとって大事なものを描く、となるのです。

【中高生からの質問】

美術とは何ですか?

【大嶋さんの答え】

「美術」は感性や認識が動き動く、その動きそのものです。物をつかう技術や作品という物のほうにあるわけではありません。「世界観が拡大変化する」その動きそのもの。



鏡をのぞきながら歩くと不思議な体の感覚!



8 | 7.8 | 11 | 日 | 木・祝

第5回&第6回……●「美術をたのしむ!こども探検隊」の企画



Cチーム

4グループにわかれ、小学4~6年生のための展示室ツアーとワークショップを企画。「小学生に伝えたいことは何か」を真剣に話し合う。グループで展示室を回って小学生と楽しみそうな作品についてディスカッションし、様々な材料を使いながらワークショップ案を考えた。「一度つくった案を壊してもいい。いいプログラムにしよう!」と、最後までめいっばい悩み、とっておきのプログラムを用意した。



Aチーム



Dチーム



Bチーム

8 | 21 | 日

第7回……●美術をたのしむ!こども探検隊

Aチーム [Wednesday]

●青木弥優●安藤一生●高木絵莉●二本柳姫乃●小学生参加者:4名

テーマ別の美術



小学生がらみで意気投合する活力がすごい! 自分たちでどんどん発言して、よい視点を持っていた。 (中学生) 思いついた企画をさらに深く考えるのが難しかった。 (小学生) 作者の気持ちを読み取るのが楽しかった。 (小学生)

最初は絵しりとりで交流。展示室ツアーでは「比較」「題名との関係」「観察」「見つける」「対話」など、作品ごとに見方のポイントを定めて鑑賞した。ワークショップは、展示作品の福田美蘭「水曜日」にインスピレーションを得て、それぞれに水曜日をイメージした「水曜日ボックス」を制作した。



水曜日のイメージで箱を飾る

8 | 21 | 日

第7回……●美術をたのしむ!こども探検隊

Bチーム [美術の極み乙女]

●佐藤明日香●茂木菜々●吉田菜乃●小学生参加者:3名



様々な角度から作品を観察してアートの世界に飛び込もう。世界でたったひとつの本を作ろう。

他己紹介や、みんなで新聞紙タワーをつくって仲良くなることからスタート。展示室では、絵画や彫刻など中高生が選んだ4作品を中心に話しながらじっくり鑑賞。展示室ツアーの感想を書くための「世界でたった一つの本」を製本し、表紙をマスキングテープなどでカラフルに飾りつけた。



彫刻のポーズをまねっこ



緊張したけど、自分も小学生も楽しむワークショップも行った。 (中学生) 小学生は思ったことをすらすらに言えるのがいいなと思った。 (中学生) 副: 爽ちゃんと見たことがなかったから、新しい発見ができた。 (小学生)

8 | 21 | 日

第7回……●美術をたのしむ!こども探検隊
Cチーム [Sometimes Glasses]
●大井花歩●金森紫乃●浜田清遥●小学生参加者:3名



美術を楽しみ、身近に感じよう!
小学生は伝えるのが楽しかった。美術するのってこんなに楽しかった。(中学生)
みんなで作った二日(中学生) みんなで制作できて楽しかった。(小学生)

まずは緊張ほぐしに身体をつかったジェスチャーゲーム。展示室ツアーでは座れる椅子の作品も含め、小学生と会話が広がりそうな6作品を幅広く選び鑑賞。福田美蘭「水曜日」をヒントに、月曜から日曜まで曜日ごとの記憶を小さな絵などにしてコラージュし、みんなの一週間を合わせて一つの作品に仕上げた。



福田美蘭「水曜日」をよく観察



みんなの一週間をコラージュ

8 | 21 | 日

第7回……●美術をたのしむ!こども探検隊
Dチーム [glasses]
●青柳梨紗●宇佐美友悠●上治唯奏●星安優美●小学生参加者:4名



表現しよう My 美術館

小学生は自分たちが思いもよらぬ楽しい作品や悲しい作品をたくさん作ることができて嬉しかった。(中学生)
小学生から自分の意見を教わることができて嬉しかった。(中学生)

初めにジェスチャーゲームでアイスブレイク。展示室ごとにめぐり方を丁寧に計画し、作品を鑑賞した。実施するうち、小学生と中高生がマンツーマンでお話しながら作品をみるスタイルに。ワークショップでは、特製の箱を展示室に見立てて様々な材料で飾り、それぞれ自由な発想で、展示をみた印象を集めた小さな美術館をつかった。



展示作品のひとつ、椅子をみる



小学生の発想に驚き!

9 | 4 | 日

第8回……●これまでを振り返って



写真を見ながら、こども探検隊の各チームの様子を報告し合う。グループにわかれてこれまでの活動を思い出しながら「自分にとって新しい体験だったこと」「見方や考え方が変わったこと」を話し合った。最後にプログラムを通しての「自分にとって一番の発見」を一言で表現。色紙やペンを使って自由に創作し、発表した。



こども探検隊の様子を発表



まとめの一言を自由制作



10 | 30 | 11 | 6 | 日

番外編……●記録誌をつくる



プログラム本編終了後、中高生有志による本誌制作のための編集委員会を開催した。1回目は過去の記録誌を参考にしながら、どんな冊子にしたいか、内容やデザインのアイディアを自由に出し合った。2回目はデザインを担当するNDCグラフィックスの事務所を訪問。1回目で話し合ったアイデアや、プログラムで印象的だったことを伝え、冊子タイトルも決定。デザイナーの森上暁さんから「デザイン」についてお話を伺い、海の見えるおしゃれな事務所を見学した。



載せたい写真やデザインのアイディアを出す



デザイナーの皆さんにアイデアを伝える

あとがき



十 日方ぶりに自分の中高生時代の日記を読んでみて、当時と今では考えていることがそれほど変わっていないことに驚いた。中高生ともなれば、その人らしいものの考え方や感じ方の骨格が出来ており、そこから様々な経験を得ることで、豊かさを増し深化していく。大嶋貴明さん(第4回講師)が挙げた「世界観の拡大」という言葉に象徴されるように、本プログラムは中高生にとって、それまで自分が持っていた認識を超えていくことの連続だったようだ。

多種多様な作品が並びコレクション展を中高生が小学生とともにツアーするために必要なのは、作品や作家の情報以上に、自らの目で作品と向き合う楽しみを知ることであり、今回のプログラムは組み立てられた。つぶさに作品を見つめれば見つめるほど多くの気づきを得られること、美術との向き合い方は多様であること、美術について考えを巡らせることのもつ意味などを、3人の講師によるワークショップを通して彼らは自ら体験的に理解し、吸収していた。こども探検隊の企画をする際には、それまで講師に導かれて作品と対峙してきた中高生が、初めてグループの仲間と展示室に向かった。「何を表現しているんだろう」「小学生はどんな反応をするかな」と、作品の前で真剣な話し合いはいつまでも続く。その姿は3つのワークショップでの経験の大きさを物語っており、ツアー本番はもう大丈夫だと思わせてくれた。当日は、思いもよらない発想で作品を読みとく元気いっぱいの小学生に刺激を受け、それまで何度も繰り返し見た展示を新鮮な気持ちで受け止めていた。同じ作品でも、一緒に見る人が変わると全く違った鑑賞体験が生まれるおもしろさを見つけたようだ。

6月の初回からプログラムが進むにつれ、美術について話す時、中高生はどんどん生き生きとした顔になっていった。その楽しさに気がついたことを私たちに語ってくれる様子は、内に秘めた熱気を発している。きっと彼らはこの先も、美術はもちろん、新しい世界やものの見方との出会いを大いに楽しみながら歩んでいってくれる。その確信が一番の収穫だと思っている。

横浜美術館 教育普及グループ 鑑賞教育エデュケーター | 学芸員
河上祐子



横浜美術館 中高生プログラム { 美術を体験しよう! 伝えよう! } 記録誌

ミュージアム 見遊自編夢

◎発行

横浜美術館 教育普及グループ 教育プロジェクト
220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1
<http://yokohama.art.museum>

◎発行日

2017年3月

◎編集

参加の中高生有志
横浜美術館 教育普及グループ 教育プロジェクト

◎デザイン

NDCグラフィックス

◎撮影

加藤 健(14~17ページ)

◎印刷

株式会社 協進印刷



表紙のイラストは、講座各回の終了時に印象に残ったことや感想を中高生が自由に書き留めた「今日の発見」ノートから抜粋した。冊子タイトル「見遊自編夢(ミュージアム)」は中高生の提案による。